

異世界マンガ作画大賞 課題作品 2 (男子向け)

◆概要

主人公ジョン・ウィルソンは村では神童と呼ばれるほど優秀なテイマーだった。しかし、冒険者になってからは格下しかタイムできないスキルのせいで、周囲からは馬鹿にされ、拳句の果てにはパーティーリーダーに冒険者ライセンスを奪われてしまう。そんな彼に手をさしのべたヒロイン、モーリン・ケイルは、彼が A ランクの魔物をタイムしたのに驚き、そして彼のスキルの本当の姿を伝える……。

◆キャラクター設定

○ジョン・ウィルソン

年齢 16、クラス：テイマー、主人公

特徴：心優しく、タイムした魔物とは友達のように接する。だが、自分に自信がない面もある。出身の村では神童と呼ばれ、かなり能力に自信があったが、王都で冒険者続けるうちに鼻をへし折られた。不甲斐ない土産話しかないため、里帰りできないでいる。まだ自分の真の能力を理解していない。

○モーリン・ケイル

年齢 17、クラス：剣士、ヒロイン

特徴：クールで正義感が強い。縛られるのが嫌いなため、しばしば自分勝手に頑固な態度を取る。子爵の家系に生まれ、聖騎士養成学校でも優秀な成績を修めていたが、軍属の上下関係に辟易し自主退学。以後は冒険者として自由に活動している。家とは絶縁状態。

○キース・ディラン

年齢 25、クラス：剣士、連合パーティーのリーダー

特徴：横柄で傲慢。自分の強さを誇示するが、勝てる相手としか絡まない。根は小心者。スラム出身。幼い頃は身体も気も弱かったが、孤児のコミュニティにて偶然にも剣術を教えてもらい、だんだん強くなった。コンプレックスのためか、安定した生活と相手を従わせることに固執している。自分より強い相手には、一も二もなく諂う。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

※ここまでの展開

連合パーティーを組みダンジョン攻略をしている途中、へまをしたジョン・ウィルソンは、パーティーリーダーに冒険者ライセンスを奪われ、「格下しかタイムできない」スキルを馬鹿にされてしまう。そんな彼を助けた剣士、モーリン・ケイルは彼がAランクの魔物をタイムして治癒魔法を使っている所を目撃し、彼の本当のスキルは「格下しかタイムできない」というものではないと確信。そこで彼女は真偽を確かめるために、自分をタイムしてみようことを提案した。

「私をタイムしてみて」

「!？」

彼女（編集部注：モーリン・ケイル）は真顔で言った。

「あなたのユニークスキルを検証する」

「いやいや、人間をタイムするなんて無理だよ!？」

いくら天才タイマーでも、人間のタイムなんて無理に決まってる。

タイムの原理は魔物との有利な契約で、いうなれば魔力の制御権を奪う行為だ。

しかし、人間同士の魔力は融合するため、制御権は必ず分譲される。

要するに、魔力性質が根本的に違うからこそ、タイムが可能なのだ。

「いいから早く」

「……ま、まあいいか……どうせ無理だし」

モーリンが納得するまで付き合おう。

そう考えて、俺は彼女の頭上に手を翳した。

「じゃあモーリン、猫のモノマネをしろ!……なんちゃって」

悪ノリでも、まさかこんなことはしないだろう。

モーリンも納得してくれるかな？

「……………」

命令を聞いたモーリンが黙りこむ。

「あ、ごめん、変なこと言ったよな？えっと、もしかして、怒った？」

気まずい……ここはフォローすべきか……

などと、俺が考えていると――

「にゃーんっ♪ジョンはニャーのご主人様だにゃー♪」

――モーリンはいきなり、俺に抱き着いてきた！！

「えええ！？！？も、モーリン！！？」

「ご主人様大好きにゃーん♪にゃんにゃん♪なでなでして♪」

「な、え、モ、え……っ？モーリ、え、モ、え？モーリンっ！？」

な、なんだ、この可愛いモーリンは……！？

……じゃなくて、この状況はヤバイだろ！！

彼女の尊厳に関わるぞ！！

「モーリン！冗談はやめてくれ！」

「にゃ？ニャーはご主人様のペットだにゃん！」

「そんなワケないだろ！？」

ヤバイ、なんかよく分らんけどヤバイ！

本気でタイム成功したってことなのか！？

う、うそだろ……モーリンって魔物だった！？

「リリース！！元に戻れ、モーリン！！」

慌てて契約破棄すると、モーリンはハッとする。

「……ふにゃっ？あれ、私……」

彼女は周りをキョロキョロして、現在の状況を静かに整理し……

「……っ！」

俄かに顔を赤らめた。

「ご、ごめん、ジョン……………」

「ああ、その……いや、いいんだ。元に戻って良かった、はは……」

「ん……………」

今までのクールな印象とは裏腹に、小さく俯いて謝る彼女。

……正直、すごく可愛い。

あんなことされた後だから、ギャップで余計に……い、いかん。

それとなく、視線の交差を避ける。

すぐには霧散しない気まずさを感じた。

「ジョン……今のは忘れて。それより検証結果が大事」

「そ、そうだな！で、結果はどう？」

機械的に訊ねると、モーリンは俺の耳元へ口を寄せてくる。

吐息が……くすぐったい。

「——……——……………」

「……っ！？そ、それが俺の、ユニークスキル……！？」

「十分に有り得る。ジョンのタイムは、普通とは性質が違う」

それから、彼女は続けた。

「ジョンの力なら、ライセンスを取り返せる」

「え……あ、ああ」

確かに、言われた通りの能力なら可能性はある。

「でも、俺……」

「奪われたままじゃ、紛失届も受理されない。冒険者を辞めることになる」

「……っ！そ、そうだな……でも、相手はキースだ……」

仮に、モーリンの考察が外れていたら？

キースと俺じゃ、腕相撲にもならない。

負ければ、もっと恥をかくだけじゃないのか。

「俺なんかが勝てる相手じゃ……」

「ジョンっ！」

ふと、俺の耳に凜とした声が響く。

顔を上げると、モーリンの切なげな表情が目に入る。

「あなたは誰の奴隷でもない。不条理には、やり返していい」

少しだけ、風が吹いた。

モーリンの前髪が靡く。

「……そう、か。そうかもな……」

木漏れ日の光と影が、やけに鮮明に交差している。

騒つく木の葉が俺を急かす。

「分かった。やるだけ、やってみるよ」

気付けば、そう口走っていた。

連合パーティに追いついた俺は、すぐにキースへ要求を突きつけた。

「……ああ？ライセンスを返せ、だと？」

「そ、そうだ。返してくれ」

周りの連中はシーンと静まり返る。

しばらく俺とキースの睨み合いが続き……

「くっ……ぶ、ははっ！くっだらねえ！」

やがてキースの失笑が堰を切った。
追従して、周りの連中もドツと笑う。

「はっはっは！冗談だろ？」
「ジョンがリーダーに勝つ？無理無理！」

他人の反応なんて無視だ。
問題はキースがどう反応するかだ。

「バカだぜテメーは。そんなにライセンスが欲しいか？」
「ああ。俺は冒険者を続けるんだ……君を倒してでも」
「ふはっ！おー、いいぜえ？なら剣闘でもすっか？」

よし、挑発に乗った！

いい流れだ、相手は自分の負けを想像してない。
「剣闘だな、やろう。勝ったらライセンスを返してくれ」
「くっく……！面白エじゃねーか、オイオイ」

こちらが提案に頷くと、キースはニヤリと笑う。

「お前らァ、探索中断だァ！！」

その掛け声で周囲はワッと沸き、熱狂が場を支配し始めるのだった。

「ルールはただ一つ！！相手に『参りました』と言わせること！！手段は問わない！！」

森から抜けた、湖畔の大平原。
名前を覚えていない誰かが、いつの間にやら場を仕切る。

「無論、場外への逃亡は失格！！周囲は魔法の壁だがな！！」

魔法の無駄遣いで作られた、障壁展開による円柱の簡易コロシウム。
その内部に立つ俺は、剣を構えてキースと対峙していた。

「ジョン、ここがテメーの墓場だ。正真正銘のゴミにしてやる」
「……………」

キースは俺を殺す気でいる。
ダンジョンでの人死には誤魔化される可能性が高い。
意地を張れば命の保証はなさそうだ。
観戦客たちは揃ってオッズを吊り上げる。
俺が大穴予想らしい。
歓声とともに、いくつか無責任な怒号が飛んできた。

「ジョン、頑張って」

そんな中、近くから彼女の声がする。
振り向けば姿があった。

「ルールはなんでもアリ。あなたが参りましたと言わせればいいだけ」
「ああ、モーリン。でも俺はキースを跪かせるとか、そういう気はないよ」

俺の言葉を聞いて、どこか楽しそうに笑うモーリン。
右手に大穴予想の賭け札を持っていた。

「うん、分かってる。大丈夫、あなたは強い」

その力強い言葉に、俺は笑みを返す。
と、話しているうちに、

「――両者、見合って！！」
「えっ、ちょ、」
「レディ・トゥ・ファイトオッ！！」

仕切りの人が戦闘を開始してしまった。

ルールもなににもないじゃないか。
始まった瞬間、キースが突っ込んでくる。
獲物へ嘯みつくアサルト・ウルフと遜色ないスピード。

「剣士に勝とうなんざ、一万年早エんだよっ！！」
「うっ……！？くうっ」

振り下ろされたブレードを受けるが、姿勢を崩された。
間髪入れず、洗練された連撃が襲い来る。
「おらっ、どうしたどうした！！死ぬぜ！？」
「うわっ……！？や、ヤバいっ」

1

刃の拮抗は押し切られ、スラッシュが首を斬り落としにかかる。
ギリギリ屈んで避けるが……

「隙だらけなんだよっ、バアカ！！」
「ぐあっ……！！」

無防備な体勢を素早く蹴り上げられた。
ガードは間に合わず、モロに顔面を打されノックバック。
仰け反った身体を横に倒し、ギリギリで受け身を取る。

「く……ううっ」
「ひゃははっ、ンだその体たらくはよォ！？」

やはり剣術や体術では勝ち目はない。
頼みの綱はスキルだが……キースのタイムは最終手段だ。

(……場外から、魔物をタイムすれば……)
「ああ？なにボソボソ喋ってんだ、テメーは？」

透過された障壁の向こうを探す。
しかし、魔物の姿はない。
ただ湖が広がるこの場では、水棲の魔物も身を潜めている。

「……ははあ、読めたぜ。自分じゃ敵わねえから、外から魔物を寄越そうって魂胆か」

「……っ！」

「だが残念、このコロシウムは魔物が来ねえ場所を選んで作ったんだぜ？」

そうか……言われてみれば当然。

こんな無防備に遊ぶくらいだ、襲撃を考慮しないはずがない。

「身の程が分かったか？おら、大人しく土下座しろよ」

「……嫌だ！負けるワケにはいかないっ！」

「チッ、ゴミがよォ……殺されなきゃ分からねェか、よっ！！」

またも振り下ろされる重い一撃。

咄嗟にブレードで受けると、剣戟とともに火花が散った。

「ぐうあぁっ！？」

そして――俺の剣は大きな音を立て、真っ二つになった。

「け、剣が……！？うわぁっ！！」

あまりの衝撃に身体も吹き飛ばされてしまう。

今度は受け身さえ取れず、ゴロゴロと転がされた。

「はっはっは！！テメーの剣が折れちまったなァ！」

「……く、くそお……っ」

「つまんねーぜ、こんなんじゃあよォ！あぁ！？はっはっは！！」

キースは頻りに剣を振り回し、自らの腕力を見せつける。

「くくく……！！俺のユニークスキル【フルスイング】は、剣を空振りするほど攻撃の威力が上がる！！」

その間にも、俺は場外へ目を配った。

もう時間がない。

(魔物……どこかに、魔物さえいけば……！)

祈りながら、視界を何度も確かめる。

遠くに見える木々の隙間、煌めく湖面、そして晴れ渡る上空。

しかし、どこを探しても、生物の鳴き声さえ聴こえない。

魔物たちも、この熱狂を意図的に避けているのだろうか？

「この動きが終わる頃にゃ、テメーのようなカスは一撃で粉と化すだろうゼエ
ェ！！」

(くそ……っ！頼む、一匹だけでも……あ、あれは！？)

焦燥とともに観戦客たちのほうを見た時、そこに希望があった。

誰もが注意を向けない、足元の間——小さなホーリー・ラビットが鳴いていたのだ。

「……きゅう」

「ま、まさか、あの子は……さっきの……？」

熱狂の中、冒険者たちの足元まで無警戒にやって来たらしい。

その小さく赤い瞳は、俺を心配そうに眺めているではないか。

『ホーリー・ラビットは、Aランク相当——』

信じられないものの、可能性はある。

迷わず右腕を伸ばし、タイムの構えを取った。

「ホーリー・ラビット……力を貸してくれ！！」

「きゅっ？」

魔力を送り込むと、白い耳がピクリと動く。

それから一秒、二秒……三秒後、俺の意思が伝わる！

「その障壁を壊してくれ、ホーリー・ラビット！！」

「きゅー！」

確かに頷いた！

そしてホーリー・ラビットは、物理的衝撃をほぼ通さない障壁に……ドンッ！

「きゅうっ！」

「た、体当たり……！？」

一度だけ、体当たりをしてくれた！！

「……いやいや、体当たりで壊れるワケ」

俺は思わずそう言ってしまったが……しかし、変化が起こる。

「さあて、そろそろテメーにトドメを……ん？」

魔法物質が軋む時の、透き通るような残響音が鳴る。

徐々に勢いを増し、共鳴する軋轢に、キースの動きも止まった。

「なんだ……なにが起こってやがる……」

——ビシッ！！

やがて、障壁の一部に大きな亀裂が入った。

不穏な音に、その場にいた全員が目が向く。

「お、おい……リーダー、壁が割れてるぜ！！」

「ああ！？」

「こ、このままじゃ障壁が……！！」

亀裂は瞬く間に枝を伸ばし、あっという間に障壁を埋め尽くす。

やがて誰ともなく叫んだ。

「崩れるっ！！」

ビシ、ビシビシッ！！

ガシャアア……——ンっ！！

「うおおっ!？」

「きゃあっ!!」

短い悲鳴が一斉に上がると、壁は脆く崩れた。
誰もがそのド派手な現象に慄く、そんな中……

「きゅーっ!」

「ホーリー・ラビット!よし……っ、キースに飛びつくんだ!」

「きゅきゅう!!」

俺はホーリー・ラビットへ指示を出した!
そして、俺はソイツがAランクであることを確信した!
その白い身体は風を追い越し、地面を蹴って跳びあがり!
キースの顔に張り付くと、淡い光を発し始める!

「ぐうおおっ!？な、なんだ!!なんか飛びついて来やがった……!？」

「きゅっ!!」

「……おうっ、なんか身体が暖か……いや、熱いっ!？あっ、あづづうっ!!？」

光はキースの全身をも包むと、さらに光量を増す!

膨れ上がった癒しの力は、膨大なエネルギーによって熱さえ含み……!!

「って、ストップ!!ホーリー・ラビット、ストップ!!」

「きゅっ?」

「それ以上やったらキースが死んじゃうぞ!!」

「きゅー」

熱に浮かされていたのは、完全に俺のほうだった。
指示を聞き届けたホーリー・ラビットは、すぐに光を納めてくれた。

「身体が、あついーっ!!参った、参ったから助けてくれエ、誰かアーっ!!」

キースは目の前でたうち回り、装備を脱ぎ捨て、身体を掻き毟る。
途轍もなく無慈悲な光景。
眼を瞑らずにはいられない。
ともかく俺は、無事に勝利を収めたのだった。

「リリース！ありがとう、ホーリー・ラビット」

「きゅ♪」

俺がリリースすると、ホーリー・ラビットは何度か飛び跳ねる。

「ふふ……またダンジョンで会おうな。今はさよならだ」

「きゅ！」

別れを告げて、森のほうへ跳ねていく背中を見送った。

すると、背後から伸びる影が俺を覆う。

何事かと振り返ると、キースが鬼のような顔をして立っているではないか。

「な、なぜテメーごときにアレをタイム出来んだ……?!」

「キース……負けたのに、まだ俺を下に見るのか」

「う、うるせえ!!俺が負けたのはテメーじゃねンだよォ!!」

未だに負けを認めず、ライセンスを返そうとしないキース。

しかし、もう反故にされる心配はない。

「負けたくせにジョンに楯突いてんじゃないわよ!ザーコ!」

「そうだ、このクソリーダー!ライセンスを返せよ!」

パーティメンバーはみんな、俺の味方をしてきている。

今まで彼らに良い印象はなかったけど、こうなると少し頼もしい。

「ぐ……へ、へへ、知るかよ……俺ァ、約束なんざ守らねえ」

「そんな……頼むからライセンスを返してくれ」

「な、ならもう一勝負だ!今度はタイム禁止で……!」

俺がゴネるキースを説得していると、呆れた様子のモーリンが口を開く。

「……ジョンのスキルを教えてあげる」

「ん、んあ?」

「彼の本当のユニークスキルは、格下をタイムするなんてモノじゃない」

そう、おそらく違うのだ。

それではAランクの魔物をタイムできた事実に説明がつかない。

つまり、真実はモーリンの考察通り……

「ジョンは——自分より背の低い生命体を、無条件で使役できる。これで、ほぼ間違いない」

と、いうわけだ。

「なァっ、なん……だと……？」

キースが素っ頓狂な声を出して驚く。

が、間髪入れず、モーリンは続けた。

「使役対象は人間も例外じゃない。つまり……」

「ああ……？う、うおおっ、なにしやがんだっ」

言葉のついでに、彼女はキースに近付き、その頭を押さえつける。

「こうしてあなたの背を低くすれば、タイム可能ということ」

「っっっ！？」

「分かったら、さっさとライセンスを返して」

「わ、わわわ分かった！！だからタイムしないでくれ、頼むウ！！」

モーリンの見事な脅しは効果テキメンだった。

ライセンスは呆気なく放り出されて、俺の手元に帰ってくる。

「……ほっ。良かった、冒険者が続けられて」

「うん。私も嬉しい……良かったね、ジョン」

「えっ？あ、ああ」

不意にニコッと笑いかけてくれるモーリン。

その可憐さに、俺はまたもライセンスを落としそうになった。

なんとか持ち直して、カッコ悪くないように取り澄ます。

「こ、これも君のおかげだよ。ありがとう、モーリン」
「ジョンが自分の力で頑張っただけ。だけど、それでも感謝してくれるなら――」

彼女はスルリと俺の懐に入り、耳元へ囁く。

(私のパートナーになって)
「……ほえっ!？」
(パーティを……組んで欲しいの)
「あ、あっ、そ、それはもちろん……喜んで……」

……吐息が、すごく直にかかって、くすぐったい。
これは……誰が断れるのだろうか。

「ふふっ」

身体を離れたモーリンは、目の前で満足そうに目を細める。
その瞬間、俺は雷に打たれたような衝撃を感じた。
モーリンって、超かわいい。

「行こ、ジョン。最初のクエストを選びに」
「あ、ああ……って、クエスト？それは現在進行形では……？」

彼女は俺の手を引いて、ダンジョンの出口へ急ぐ。
すると、後ろから連合パーティの声が聞こえる。

「お、おいっ!？お前ら、まだダンジョン攻略は終わってねーぞ!」
「そうよ!二人の力が必要なのよ!？戻って来なさい!」

俺達は、なぜか振り返らなかった。
背後には、もう必要のないものが無い気がして。

「あんな都合の良い人たち、どうでもいい」
「はは……モーリンって、意外と感情的に動くんだな」
「うん。だって、私は縛られたくないから……」

森の木々も、魔物たちも、みんな背景だった。
走っていく二人を見送ってくれる。
吹き始めた涼しい風が、背中をドッと押してくれた。

「でも……ジョンは違う。ジョンは優しい人」
「俺が？ そうかな……」
「あなたは誰も縛らない。私、そんな人、初めて見た」

騒めく葉の音を置き去りに、やがて俺達はダンジョンを抜けた。
ダンジョンゲートから平原へ放り出され、そこで初めて歩を緩める。
胸の高鳴りからか、少し息を切らして。
モーリンは俺に振り向くと、眩しく微笑んだ。

「あなたとなら、伝説を作れる……そんな気がするの」

それは俺が……心のどこかで求めていた言葉。
目の前の英雄が、俺を求めているんだ。
差し伸べられた細い手を取る。

「最強の冒険者に、なろうぜ……！」

刹那、燃え上がる夢が、全身を焦がしてくれた。
ああ……俺の冒険は今、始まったんだな。